

4. せきどう 石幢

位置 (第44図)

この塔は、現在三隈川南岸の河岸段丘上にあり、鏡坂公園へ上る道路の脇にひっそりと立っている。石幢は一般に六面石幢とか六地藏塔と呼ばれ、笠の下の龕の各面に一軀ずつ、合計六軀の仏像を区画して彫出する「仏龕式」という様式に区別され、普通中台の下に六角竿柱を設けている。

『日田金石年史』によれば、もとは鏡坂にあったとされ、それが昭和 年頃に現在の地に移築したようである。この鏡坂近辺には古寺などがあったことは記録や伝えにもないが、中世にはこの見晴らしのよい高台に寺が建てられ、その一角にこの供養塔が立てられたことが推測される。それが近世・現代に至り寺が失われてもこの石幢だけは地元の人々に守られ続け、現在に至ったものであろう。



第44図 石幢位置図(1/5,000)

現状（第45図）

この塔は凝灰岩の軟質な石材を使い、宝珠は欠損しているものの、笠・龕・中台・幢身・台座は全体的によく残存している。笠・龕・中台・幢身・台座ともに六面を呈しているが、方向は移築した時に一度切り離して据え直したためずれている。また笠と龕、中台と幢身、幢身と台座の間にはこの時の補修の痕跡が残っている。現状の大きさは、台座から笠頂部まで高さ約148cmを測る。

各部位についてみて見ると、まず笠については幅約56cmを測り、頂部は一部欠損している。彫刻は細かく、6面を区切る方向には稜線を際立たせている。

次に龕は六面にわたって幅約12cm、高さ約20cmを測る長方形の彫り込みの中に、六昧の地藏を彫出している。地藏のそれぞれの手には異なる道具が彫られ、また地藏の服などには白色を使った彩色が施されている。

中台の幅は一部欠損しているが最大で約65cmを測り、やはり六面に稜をつけて面取りしている。台座の上面は平坦であり、側面には蓮弁を陽刻している。

次に幢身についてであるが、やはり幅約18cm、高さ約72cmの面取り部分を六面に設け、そのうちの一面のみに文字を陰刻している。文字は三行にわたって、

奉造立六道能化主六地藏菩薩□相當為□□禪尼追膳

是長禄第 季應鐘念 日大施主沙門恒傳叟

毎日早朝入諸定入諸地獄令離苦無佛世界度衆生今世後世能□□

と書かれており、その内容から、沙門恒傳叟という人物が長禄四年（1460）十月二十四日に亡き禪尼を追膳供養するために立てられたことがわかる。

まとめ

石幢は大分県内を見ると、その中心は大野川流域の南部に多く残っており、いずれも高さ2m以上で笠がしっかりしたものが目立つ。また九重町野上に残る滝上石幢は、造立年代が長禄二年(1458)で高さも宝珠まで含め171cmと高さも小さくこの石幢と比較しよく似ている。

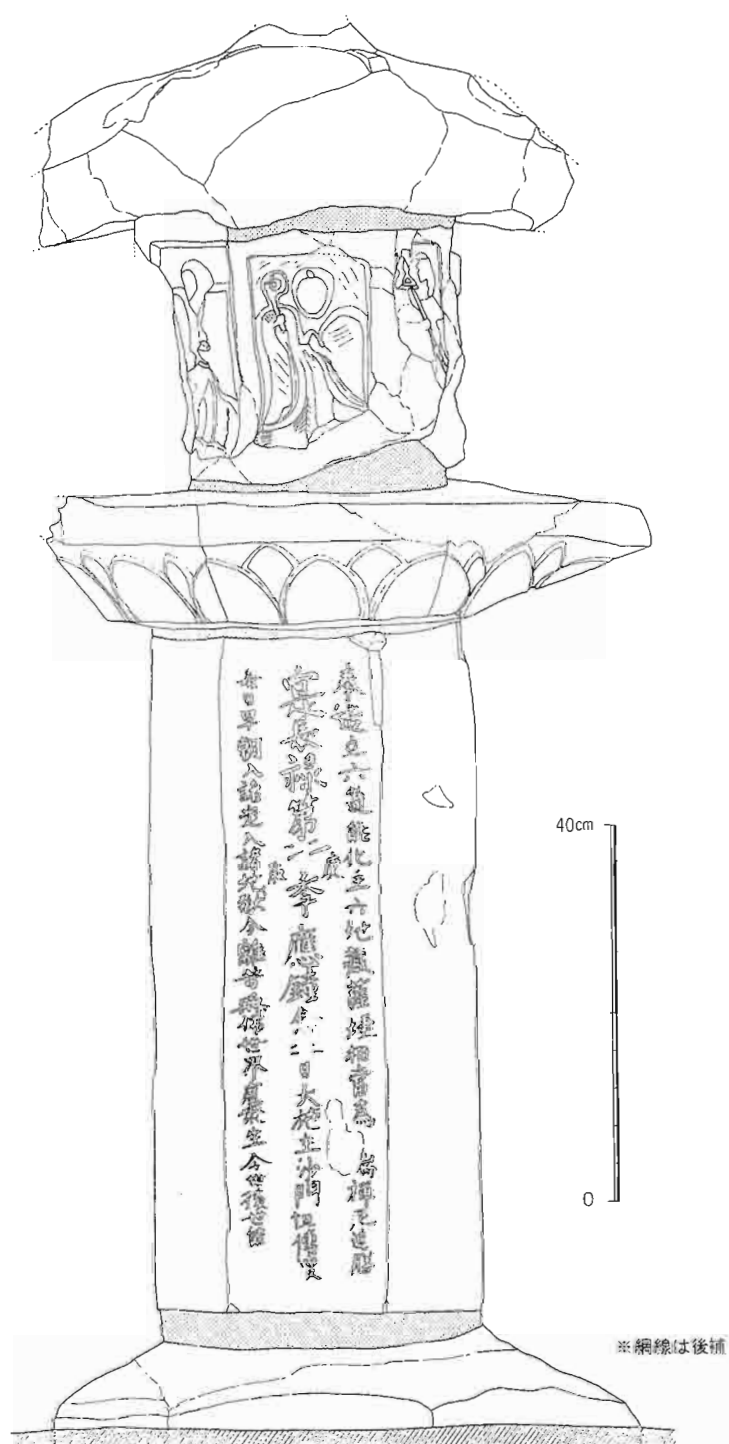
日田市内について見てみると、他に豆田町広瀬家にある永正2年(1505)のものがあるだけである。この像もやはり「仏龕式」で六面に地藏像を彫出している。また幢身の一面に「永正二年拾月廿二日 妙依 道永 道善 施主」と陰刻されており、施主三人の名と造立の年号を知ることができる。

参考文献

『日田の文化財』 日田市教育委員会 1984

『日田金石年史』上巻 日田市教育委員会 1973

『大分県の文化財』 大分県教育委員会 1991



第45図 石幢実測図(1/8)



石懂近景(南方向より)



石懂正面